南砺・家族ケアの高齢者アンケート

学会誌に論文掲載

富山大附属病院研究者が分析

南砺市の高齢者アンケート結果から家族らを看病、世話しているお年寄りは、していない人よりも、生きがいを感じる傾向が強いという分析結果を導き出した富山大附属病院研究者の論文が、日本プライマリ・ケア連合学会（東京）の会誌に掲載された。

このアンケートは2014年6～7月、南砺市内の65歳以上の住民約1万8千人に行い、約1万4300人から回答を得た。15年に、富山大附属病院とやま総合診療イノベーションセンター特命准教授だった黒岩祥太統計アドバイザーが、看病や世話などのケアをする相手の有無と、生きがいとの関連を分析した。

この結果、ケアする相手がいる人の方が生きがいを感じる傾向が強く、健康度などの影響を取り除いても、その傾向が変わらないことが分かった。

この分析を踏まえ、「ケアの役割を担うことが、高齢者の生きがいや自尊心にプラスの関連を持つ」と結論づけた。今後の課題として、ケアの負担の大きさと生きがいなどとの関係を、より厳密に捉える必要があることも指摘している。